

童子

室生犀星

青空文庫

母親に脚かっけ気があるので母乳はいつさい飲まさぬことにした。脂肪の多い妻は生ぬる白い乳をしぼっては、張つてくると肩が凝つてならないと言つて、陶物すえものにしぼり込んで棄てていた。少しくらいなら飲ませてもよいと云う樋口さんの説ではあつたが、私はそれに反対し、妻もそれに同意した。脚気症の母乳はよく赤児あかごの脳を犯すことや、その取り返しのつかない将来すえのことを思うと、絶対にやつてはならないことだった。「あなた方がそんなお考えなら勿論もちろんやらない方がいいんです。あとあとのことを考えると良くないから。」医者の樋口さんも毎時いっつものように強情な私を知っているため賛成したのである。「こんなにかつて張っているのを飲まされないなんて……すこしくらいなら関かまわれないんじゃないでしようか。」

母親は、寛ひろい胸から乳房を掴み出し、柔らかいぽとぽと音を立てて陶物に滴たれる乳を見ながら、口惜くやしそうに云つた。

私はあくまでもそれを叱りつけ、看護婦会で周旋しゅうせんをしてくれる筈の乳母の来るのを

待った。口入屋くちいれやが千葉のもので、その千葉から口入屋のおやじと乳母とその母親とが、今日明日のうちに上京してくるといふことだったが、返電さえも来ないので、牴牾もどかしかつた。

「素性の知れないものの乳を遣るのは、どんなものでしょう。それに病気なぞあつたりすると、牛乳で育てるより却かえつて悪くならないでしょうか。」

「よく医者にからだを診て貰かつたらいい。医者がよいと言えればいい。」

そう話しているうちにも、朝と昼と、そして晩には、女中の夏と、世話をしてやっている平林とが交かわる交かわる貰かい乳をしに、動坂まで行かなければならなかつた。そのたんびに平林に、乳を呉かれる女の人のことを、私は気に病んでは尋ねた。

「子供が三人も四人もごろごろして二間きりの家です。けれども乳はたくさん出るらしいんです。」

「こちらから行くと厭な顔をしないか。」

「厭な顔なぞしません。」

「三度に一度くらいでも、晩方なぞ忙しいときに……。」

私の気もちを知っている平林は、「そんな事は無い」と言つた。そして、

「家じゆうのものが行くごとに赤ちゃんは今日はかげんがよいかとか、わるかったら関わらず乳を棄ててとりに来てくれとか言つてくれるんです。乳は時間を見計つて新鮮らしいのをお上げすると言つているんです。」そう言つたので、私はまだ会わないが善い人達だと思ひ、心から感謝した。

「そうか、こんどは何か持たせてあげないと悪い——。」

夏も口をそえ「ああいう親切な人たちはない。」と言つた。瓶びんのなかの温かい乳を、母親はいつも一度掌にあてたり、滓がないかと明るみに透したりして、嬉しがった。その消毒をしながら、

「家うちのひと人多いんですから何を呈あげたらいいでしょうね。」

そう言い、お祝いの品物の、さしあたり要らないものをあれも上げるこれも呈げると言つた。そして自分の乳をしぼり、陶物にたまった濃い白い液体を覗きこんだ。

「こんな乳が出るのに、これが飲まされないなんて——。」

そういうと、そつと夏に、「こつそりと飲ましてやりたい。」と言つた。

「そのコツソリで万事ブチコワシになることがあるぞ。」

私は気むずかしく叱りつけた。しまいに乳を棄てるところがなくなり、庭の萩の植つた

陰地を掘つて棄てた。

或晩、玄関に客があつたので、家のものが忙しく、私が何気なく出た。が、まだ一度も来たことのない女であつた。

「あの……動坂から参つたんでございますが。」

「あ、動坂からですか。」

すぐ貰い乳をさせて呉れる人だと思つた。手巾に包んだ瓶をさげ、妹らしいのが格子の外で、からだをちぢめていた。

「いつもお世話さまで……オイ、動坂から入らいつたよ。」

そう奥へ声をかけると、妻も夏もみんな出て来た。

「お手すきがございますでしょうと、こちらへ序手ついでがありましたものですから。」

手巾を開き、乳の瓶を取り出した。藍色の浴衣地ゆかたじの、袖がよれ、スリ切れた履物はきものが目立った。

「まあ、ご親切に、どうかおあがりなすつてくださいいな。」

こんどは格子戸に隠れるようにしている妹の人にも、「お這入はいりなすつて——。」と、初めて会つた妻は、くれぐれも乳のことを頼んだ。太い腕をしているので、その健康なこ

とは疑うまでもなかった。私は安心をした。

「毎日お乳をさし上げていまして、もしも腐ったりなぞしたりしては、大変だと思いましてね。」

「いえ、すっかりゴムの乳首にも慣れましたものですから——三度ずつおいそがしいのに頂いたりなぞして——。」

妻はそういうと、赤児のねている部屋へあんないをしながら、

「ともかく一度見てやって下さい。こんなに肥って。」

「まあよくお肥りになって……。」そう四十近い女の人は言い、「どんなお子さまでしょうと毎日お噂をしていたんでございますよ。それにどうしましょう、こんなにお可愛くて——妹が今日こそ行つて見ましようときかないんでございますよ。」と、妹の羞しがるはずかのを目でふりかえった。「そんな事をわたし言いはしなかつたわ。」と、ぞんざいに言つて妹なる人は赤ぐろい顔をそめた。

「これでわたしも何んだか安心いたしました。気にかかるものでございましてね。」

小さい唇を締めるように言つて、勝気そうな顔をした女は立つて玄関へ行つた。その人が帰つてしまつてから、みんなは話し合つた。

「気になって気になって為様しやうがなかったんですよ。きつと。」

そういう夏に、「おれにしても気になる。」と私は言った。

——一日に三度ずつ動坂へ行くのには、あまりに人手がなかった。もうすこし近いとよいのだがと皆が言い合った。それにしても乳母の方の埒らちが開かないので、むやみに急がすと明日はきつと拉つれて出かけるという返電があった。

その日、乳母は、六十ばかりの母親と、口入屋の爺さんと連れ立って来たが、私は口入屋の爺さんの顔を見ると、すぐ目を伏せてしまった。厭な奴だと、直覚的に上向いた鼻と日焼けのしたあぶらぎった顔をみたときにそう思った。

「月給は三十円くらいにしていたきましたな、それを半年分さき払いに、そして私の手間賃は十五円いただきます。」

そう切口上をいうと乳母の母親むかに、よく聞き解わけるように、

「これだけ言えばわしの役目は済んだのだから、あとはお母さんがよく娘さんに話をしなさい。」

爺さんは、こんどは老母のわきに坐り、硬くなっている健康そうな娘に、「こう話が決つたら気にいらぬ事があつたりしても、我わがまま儘を言つて帰つたりなぞしてはいけぬ——

「折角御縁があつて来たのじやから。」そう言うとき母親が、小さい膝を娘の方に向けた。一年くらいの間だから、よく辛抱をしての、ときどきわしは逢いに來るし、つむぎ屋さんに万事おまかせしてあるから——。」

眼の円い二十一二くらいの娘なる女は、その間じゆう俯向いて、一言もいわずに黙つていた。膝がしらへ乗せた指さきで膝の肌を衝ツついていそうで、しぶとい人間のような気がした。

「肝心のお乳を医者に診てもらわないと困りますね。お願いするにしてもそれが気にかかりますから。」

先方の独り定めになりそうで、私は爺さんの顔をみながら云つた。

「乳のことは千葉の医者でも診てもらつてきたんですが、大丈夫だそうです。最もお宅でも最一度試験していただければなお結構です。」

爺の言葉に続いて、母親も言つた。「この子は近年病氣一つしたことはなし、この通り頑固なからだをして居りますから心配はございません。」

娘の方を見て、この話が乳のことでコワれないかと、いくらか不安そうに言つた。

「では試験管にでもしぼつていただいで、すぐ樋口さんに見てもらいましょう。——ちよ

いとこちらへ入らして。」

妻は、乳母を勝手へつれて行き、そこで管に入れた乳を平林が医者へ持って行った。

「早稲田の方にも一軒廻らなければなりませんから、事の決まり次第に失礼いたします。」

爺さんは契約書と、周旋料とを私から受取り、大きな財布にしまい込んだ。何しろこの

ごろは乳母になる女がないから仕事に骨が折れると云った。

「二三日べつに不良わるいものも食べなかつたから、乳のわるい筈はない。」

母親は、使いの帰かえるまで、そんなことを言い続けた。乳母は、膝を固まらせ、窮屈きうくつそうにしているので、肩で息をついて居苦しうにしていた。堅気な奉公をしたことのない女のように、ときどき私や妻の方を偷ぬすみる瞳が素早かつた。

平林が帰つて来た。「乳はべつに不良いところがありません。」と言ひ、別に医者からの証明書のようなものを持って来た。妻も私も喜んだ。

「よく使つたからですから、よい乳が出る筈です。」

爺さんは、身仕度をする時、「じやお母さんは明日にでもお伺ひして、金の方のことを決めなさるとよい。わしは急ぐしするから。」と附け加え、一緒にかえるという母親と、玄関へ出た。

「なるべく汁気の多いものをいただいて、そして自分の家だと思っていないうものは不意に止まることがあるものだから。」

乳が止まることのあるものだと聞くと、乳母は、胸へ手を当て、眼を円まくした。「ともかく明日わたしが又来るから、そのとき模様を見てあげよう。」

爺さんと老母とが帰ったあとで、妻は、すぐ乳を赤児にやって呉れと云った。貰い乳ばかりしていた赤児は、ゴムの吸管とは、全然かんじの違つた柔らかい、いくらか手頼たよりのない乳母のちち首を口にふくんだ。私は悪い鱈べつこう 甲色をした乳母の胸肌を、いい気もちで見られなかった。

「おいちいでしよう。ほら、たんと出るでしよう。」

妻はその指さきで、乳母の乳房を上からこころもち圧おすようにして、よけい流れ出るようにした。乳母は、上から赤児の、うす毛の生えた頭を覗きながらいた。夏も平林も、そうして私の心にも赤児が乳母の乳首に馴染なじんでくれればよいと思つた。

が、赤児は、すぐ乳首を離した。そして泣いた。すぐ又乳首をさしつけると、ちよいと銜ふくんでまた離して泣いた。

「おかしい、出ないかな。しぼってごらん指さきで。」

こんどは乏しい乳がちびりと出たきりだった。いくらやっても同じ事であった。乳母は、顔を真赤に染めた。しばらくしてから――

「も一度やってください。」

そう妻が言いかけ、赤児の口を乳首にさしつけても、もう吸いつきそうもなかった。

「空乳首をやってみるとよい。」私がそういうと妻はすぐ空乳首を与^やつた。赤児は、吻^ほつとしたようにそれを舐^{しゃぶ}り、くろくろとした瞳を静まらせ泣き歇^やんだ。

「どうして出ないんでしょう。」

乳母は、心を焦ってしぼるほど、乳は、ちびりとしか出なかった。「毎日棄てているほど出た乳なんぞございますが。」と、乳房をぐりぐりしぼった。そうしている乳母の額に汗さえ滲んで見えた。「しばらく休んでからにした方がいい。」私は見兼ねてそう言い、心で嘆息した。胸肌のうちい皮づきがくらみを持つているのまで、気になり絶望的な気持ちにした。

女中部屋で一ト憩^ひみ^{やす}させてから、灯の点いた下で、また赤児に乳房をくわえさせたが、二度ばかりで泣き出してしまった。しらべると一滴ずつしか出なかった。――もう乳を貰いにやる時間だったから、出ない乳首をさしつけておくわけに行かないので、念のために

と最一度やって見たがやはり駄目だった。私はいら立った。乳母は、又真赤になり鼻がし
らに汗をかいた。

妻は乳母と私とをみながら「どうして出ないんでしょう。」と云い、そうして「すぐ平
林さんに動坂へ貰いに行ってもらいましょう。」と手巾に瓶をつつんでいる。夏は夕方
急しいからと、平林に行ってもらうことにした。平林は、すぐ出て行った。

「困ったな。乳首になじまないからいけないんだ。」

私は妻に、わざと乳の出ないことを言わないで、そう言った。乳母は、あぶら汗をか
いていた。

「あなたの子どもはどうしたんですの。」

ふと妻がそう尋ねると、乳母は、汗とあぶらで光る顔を擡もたげた。

「死んでしまったのです。生れるとすぐに。」

「まあ。」

妻は、目を円くしたが、私はべつに何んとも思わなかった。子供というものは死にやす
い。もろい花のように思っていたからである。

「そして千葉にいたの。」

「いいえ。」

「どこに。」

乳母は、言いくさそうに黙ってしまった。わたしは尋ねるなど目で知らせた。乳母は、やはり身体中をコワ張らせ、そのため息窒^{いきづま}りしそうに見えた。

平林がかえつて来た。

「いつもより時間が遅かったから、こちらで持つてあがろうかと今言つていたところですよ、言つて手巾にくるんであります。」

乳は生ぬるかたつた。それを消毒して飲ませると、赤児はハアハア言つて甘美そうに飲んだ。こういう風にのませてあるから、よほど出る乳でないと向きませんと、妻が誰にいうとなく言つた。乳母は、伏目に凝^{じつ}と赤児の顔を見ていた。頭がぼうとしてゐるらしく据^すわりの悪いところがあつたので、疲れている、と、思つた。

晩も遅くなつてから、夏がきゆうに書齋へやつてきて、乳母が着物やその他の用事で浅草の宿までやつて呉れと言つて、さつき持つて来た風呂敷を持ち、勝手口で今にも出掛けようとしていると言ひ、「何んでも吉原に奉公してゐたことがあるそうで、お宅は氣づまりなんでしょう。」とも云つた。

「今夜行ってもらうと、明日の朝お乳を飲ませないじゃないか。こまったことを言う人だね。」

妻は不平を言い出した。

「今晚出してやると、あの女は帰って来ないかも知れないよ。」

先刻、居苦しそうにしていた乳母が、何かを口実にして窮屈なこの家を出たいと考えているらしく私には思われた。

「そうね。でも来たばかりなのに……：……けれども分らないわね。」
妻も危ながった。

「用事があつたら明日昼間にしろと言つて呉れ。今夜はだめだから。」

夏は、その通りを言い、すぐ乳母を寝やすませることにした。あとで、

「旦那さまの仰おつしやいましたとおりを言いますと、しくしく泣いていましたの。」

妻にそう女中は告いつて、堅気な家はきゆうくつなんでしようとも云った。

翌朝、ひと晩やすんだから、乳母の乳は出るだろうと心愉しみにしていたが、やはりちびりとしか出なかつた。しまいに赤児の方で変に柔らかい乳首を厭いやがった。平林は、すぐ出掛ける用意をして玄関で待った。

「家へくる前にほんとに出たんですか。」

妻は牴牾かしがって尋ねると、乳母は、やはりいつも茶碗にしぼっては棄てていたと言った。わたしは全^{まる}で出ない乳房のように濁^{しぼ}んだ乳首を、厭なきもちで見た。

平林は、瓶をもつて出て行つた。——それを乳母は見送ると同じい仕草^{しぐさ}をその乳首の上に加えたが、やはり出なかつた。

お昼にも、白い液体は出そうにもなく、さしつけたばかりでも赤児は厭がった。——乳母は、夏を通じて、昨夜の約束通りちよいと浅草まで遣つて呉れと、しきりにせがんで利^きかなかつた。

「そんなに言うなら行つて来いと云え。どうせ帰つてこないだろうから、乳が出ないから仕方がないじゃないか。」

「それもそうね。じゃ遣りましょう。」

妻は、では、なるべく早くかえつてくるように言つて、乳母をやることにした。あとで私は、夏にたずねた。

「包みを持つて行つたか。」

「ええ、みんな、ただ歯みがきだけ置いて行きました。」

晩になつても帰つてこないことは目に見えていても、晩おそくまで勝手の戸締りをしないで置いたが、やはり帰つて来なかつた。乳母も窮屈で困つたろうが、一ト安心をした私だけはまた途みちを絶れて困つた。

「やはり当分は貰い乳をするんだな。どうも為しかた方がない。」

「外ほかにないでしょうか。」

「あれだけ捜してやつと見つけて、これだ、ちよつと急にはなかるう。」

ふたりが話していると、夏は、こんなことを言い出した。

「勝手口で乳母さんが出しなに、齒磨はあんたに上げると言っていましたから、もうかえらないんでしよう。」

莫迦ぼか正直な夏は、私たちの気も知らずにぼかんとそんなことを言ったが、私はあつちイ行けと顎あごを杓しゃくつた。……赤児はやすらかな花のような、そういうことが言えるなら、それにも増して美しいくろぐろした一線を惹いた眼をつぶり睡っていた。その息づかいは平和にわたしの耳をなごめた。

……わたしだけは四年前の冬、結婚した。その晩は珍らしい大雪の翌日で、夜中に、

雨戸一枚を繰り手洗鉢にかがんだが、銅の手杓も凍てあがっていた。何となく青い層のある明け方の空気を雪と雪とが射し合い、その明りはむしろ痛みある寒さを感じさせた。私はそこでしばらく佇ちながら、すやすや眠っているらしい女に、私がそうやって佇っていることを知らずまいと、凍った闕の上に音もなく雨戸を閉めた。

式を済すと、田端と神明町さかいの、或る百姓家の離れに住み、私は毎日抒情風な詩ばかり書いていたが、蟻の餌ほどの父が残して行った金などは、何時の間にかなくなっていた。貧しい地味な暮しをつづけているうちにも、すこしずつ自費の詩集などが売れて行った。まとめて父からの金で、私は十年ほどかかって書いた詩を書物にし、本郷の本屋へたのんで売ってもらっていた。

そのころもう父親になつている恩樹という友だちが、やってくるごとに、三つばかりの女の子を抱いていた。私には恩樹がその子どもを得意そうに抱いたり、あやしたり、おしっこをさせたりしているのを見るごとに、いつもばかばかしい気がした。連れてこないときは、決して子供へのみやげの、パンとかお弄品とかの包みをかかえていた。それがあまり定りすぎたものを見るようではあったが、恩樹は、自分で赤ん坊にお湯までつかわせるほど、好きだった。

「君のところでは、どうして子供ができないんだ。妻君はからだもわるくないし。」

恩樹は、濁らない美しい目をして、よく私にそう言った。

「どうしてかな。しかし今子供なぞできたりすると困るんだ。何の用意もないし、貧乏だし……。」

私はつとめてその話を避けるようにした。眼を逸そらせるようにしたのである。

「子供は実に可愛くていいよ。」

恩樹は、まるで天にでも捧げるように高々と子供を抱いては、遠い中野の奥までかえつて行った。町へ出ようとすると一いっしよに連れてツてくれと聞かないんだ。つい可哀そうになつてね……恩樹は、嘘をついたことのないような顔を、その子供の頬に触れさせて言った。

家主の婆さんは、女が犬を可哀がるのを厭がって、

「犬なぞお置きになるから、子に、遠いんですよ。むかしからそういうんですよ。」

そう言つては、くるごとに嫌いな犬をしつしつと門のそばで、半ばコワがりながら叱つていた。

国の方からも手紙がくるごとに、子供はまだか、まだできぬかと書いてあつた。そのた

んびに不愉快をかんじた。あちこちの結婚したての友だちがみな子供を持つのを見ると、なお子供のできることが厭な気がした。そればかりではなく、自分達さえ苦しい暮しをしているのに、それが生れたら大変だという気もしていた。貧しさの骨身を削ってきた下宿時代のことを考えると、それが生れてこないことばかり考えられた。

夫婦きりで閑暇ひまのありすぎる退屈さが、おりおり訳のわからぬ不快をともなった。女は張り合いのない顔をし、よその赤坊をお湯につれて行ったり、犬や猫を飼ったりして寂しかった。

「どうして子供がないでしょうね。」

「どうしてだか。」

むつつりと私はその話がでると黙り込んだ。そしてそのたんびに、

「子供なぞあつたら困るだろうなア。なくてさえ困るんだから。」

そういうとプライと立って、座を外した。その事に触れてはならぬと思つてか、女は、その話をしなくなり、人がくるとどうしてできないんでしょうね、と、そう云うばかりだった。

三年過ぎても、女にはそのけはいさえなかった。友だちはよくその話で、わたしを皮肉

ろうとした。恩樹は、もう次ぎの子どもを抱き、さきの女の子には、夏はずしい白のレースの洋服をきせて歩かせていた。

「子供ができる、からだがさっぱりするそうですよ。ことにあなたは頭がいたむなんてよく言いますからね。」

恩樹は、女の前でこう言つては、愠ゆうゆう々ゆうゆうしているのは、生むものを生まないせいだよ、そう当らず触らず私に言つていた。そんなときでも、よい育ちをした恩樹の眼は静かに澄んでいたのである。

「できないものをどうにも為様がない。」

私のいうことは、それだけだった。が、心にはすこしずつ子供がほしかつた。時々考え込むと、よく十年前にいたことのある下宿屋の若夫婦が、二人きりになって寝ていたが、いつまでも子供ができなかつた。夫婦がごろりと二人きりで寝ているのは、綾もない寂しいものだ、やっと思ふようになった。そういえば自分等もいつも定つて起きるにも寝るにも二人きりだった。花も綾もない。そして手頼りなくしまいには子供のないことが、夫婦きりであることに曾かつてない羞恥かさえかんじさせた。

が、愈いよいよ々いよいよ子供ができるとなると、自分というものを知っているだけに、何んだか不具

ものなぞできはしないかと、妙に不安になり、いつそ今まで通りに生れない方がよいとも思えた。——しかし、それよりも手頼りになる直接自分らの魂にも肉にも関係のある生きものが見たかった。

それゆえ私は或晩、ふと女に會つて言い出したこともない子供のことを言い出した。

「お前さえ生む気なら、子供はいつだって出来そうな気がする。」

「どうして？」

女は今までも出来なかつたものが、急にできるものでないと言い出した。私は女に、私の秘かにしていたことを、まじめに話し出した。

「そんな事をいつしていました。いつころから。」

「国で式をあげたときから。」

自分でも意想外に冷かな顔をし、なぜか気むずかしさが加わつたが、いつの間にか私は顔を紅くそめた。

「そんなこと、嘘でしょう。」

しばらくすると、女は央なかば真顔になり、きみわるそうに微笑わらいをふくんで、わたしの目を覗き込んだ。

「全く真統ほんとうのことなんだ、嘘だと思ってもよい。そのうちにできるようになるから」。

「ほんとう？」

女は腹の上へ手をあててみたが、きゆうに立つて次の間へ行つて泣き出した。そんな恐ろしいことをひとりで遣つている人とは思わなんだと云い、朝まで泣き歇まなんだ。わたしは困難なときに子供なぞできなかったこと、そして子供が心からほしいと思つたときに、生れてくるものだと思つていたので、女の泣き歇むのを待つだけだった。

が、ふしぎに女は元気になつたようなところが、それからあとに現われた。

「まだか知ら。」

女は木の実でも埋めたのを覗き込むように、自分のからだに深い注意を仕出しだした。そして折々こんなことを言つた。

「あなたは悪いことをしていたと、そう思いませんか。」

「思わない。」

そう私はハッキリ答えたが、不自然ではあると心で付け加えた。

「わたしはそれを大變わるいことだと思ひます。」

女は、むきになりそう言ったが、黙ってそれには答えなかった。

腹に子ができてから、女は楽しそうに小さい襦しやっ衣やおむつを縫いはじめた。それを幾枚も畳んでは、一枚でも殖えるのを喜んだ。胎教だと言ったり、なるべく美しい子を生むのだと、西洋の名画などを枕もとに置いては見入っていた。この女にこれまで見ることできない微妙さが、小刻みにわたしの目に映った。

「こんななら、もつと早くできてくれればよいのに、わるいお父さんだ。」

女はこんなことを、ときには言い出したが、わたしは氣むずかしい顔をし、なるべくそれには触れぬことにした。女は毎手指を折ってかぞえた。そして或晩わたしが、或る事を明あかしてから、その子が腹にきたことを知ると、蒼くなつてふいに考え込んだりした。

二

翌朝になつても乳母はこないばかりか、千葉の方へ問合せでも返辞すらなかった。為方なく毎日貰い乳をしたが、産婆からの紹介ですぐ下田端に乳があるということ、人手はなし動坂は遠いから、ひと先まず下田端の方へ貰いにゆくことにした。

「動坂は善い人たちが人手がないから、よく礼を言ってお断りしよう。」

動坂へ礼に行かせ、田端の下台へ毎日三度ずつ行くことにしたが、平林も夏もそのたんびに、下駄や着物の裾まわりを泥だらけにした。梅雨に入った元田圃であつた下台は、泥ぬにかるみで歩けない道路であつた。一度なぞ夏は泥の中をころげ、胸のところまで汚してかえつて来た。

「道路が悪いなんてまるで歩けないんですもの。」

あまりたびたびさういふので、私はそれだけなら我慢をして呉れとも言つた。が、勝手口でその事を繰り返かえされるとしやくに障さわつた。

「イヤなら止めてくれ。」

とも云つた。

平林は、泥まみれになつても、黙つて井戸端で洗足して、そのことを口へ出さなかつたが、垣根につかまつたりして歩くのか、指股に泥をよく食く附つけていた。

「どんな家かね。」

「会社員みたいな家です。」

私はさきで厭なかおをせぬか、と、気になり平林にたずねた。

「ちゃんと時間になると、瓶に乳をしぼって玄關へ出してあるのです。いただきますと言
つて持つてくるんですが、奥さんは寝そべって添乳そえちしてめったに出ていらっしやりませ
ん。」

「いつでもかい。」

「いつでも、出してあるんです。」

平林は、へんに不平のある顔をし、それを言い出してはならぬというような表情をして
いた。さきでも面倒くさがっているな、とすぐかんづいた。

「動坂の家とどちらが感じがいい？」

「そりや動坂の方です。」

「いつしぼったのかよく聞いて来るんだらうね。」

「え、おくさんはそのたびに、今しぼったばかりですと言っています。」

その日、赤児は緑便をしたので、乳のせいだと思った。その剰余あまりをすかしてみると、ど
ろどろなものが瓶の底に溜り、動かすと蝶の粉のようなものが浮いていた。

「こんな乳だから……お腹をコワしたんです。」

女は、「よく気をつけて呉ればよいのに。」と、奥さんを怨うらんだ。「きつと朝しぼつ

ておいたのをくれたんでしよう。」とも言った。

それからずっと赤児は、腹をコワし、じめじめした梅雨は部屋のなかまで湿り込み、夏と平林とは、下田端からかえると、井戸端で足を洗わねばならなかった。その高声がよく私をいらいらさせた。

「夕方はおれが取りに行く、たかが道路がぬかっているまでじゃないか。」

私はかつとし、夕方、瓶をさげ、八幡さまの垂れた緑の重い枝の下をぬけ、藍染川の上手の、二年ばかり前まで黍きびの葉の流れていた下田端へでたが、泥ぬ濘かった水溜りに敷き込んだ炭すみだわら俵わらの上を踏むと、ずぶりと足の甲へまで泥水が浸った。それを抜こうとするため、ちからが余りひよろついで、危あぶなく倒れようとした。ハネ泥で裾まわりが濡れ気もちが悪かった。

土間の湿しけた格子内の、三尺式台の上に、瓶が出て居り、白いものが這入っていた。あけられた障子うちに、すぐ床をしき、奥さんらしい人がねそべり、よく働いたらしい膏あぶらぬけた蹠あしうらがこちらへ向いて見えた。見当をつけ此処ここの家だと思った。

「ごめんなさい。」

「はあ。」

「お乳をいただきに参りました。」

「そこに出してありますから……。」

奥さんは、そう寝そべりながら言ったが、蹠の位置はうごかなかった。わたしは瓶を手中につつみ、

「いつもお忙しいところを済みません。これはいつころのお乳でしょうか。」

「今とただけですよ。」

奥さんはやはり起き上りそうもなかつたので、わたしは鶏卵の包みをそつと置き、「粗末なものでございますが、どうぞおおさめなすつて下さい。」そう言い、格子の外へ出た。道路はさき来たより最^もつと悪く、雨あしも小汚なく乱れ、四五軒つづいた長屋の入口の格子の裾がみな濡れはじめた。

わたしはなるべく、飛び飛びに歩いては、水たまりへ足を^{すべ}らさせぬように用心した。が、爪掛けをつつ込み、ぬるい水を足さきに浴びた。——それでも乳を大切に^{かか}えている自分の姿が、みすぼらしく寂しい気がした、八幡坂を上りかけると、塀の内^がわに、卵の花が暗い雨に浮きながら腐^{くた}れていた。

「大変な路だ。まるで歩けない。」

井戸端で足を洗い洗い言うのと、夏は、くすくす微笑っていた。が、女はさっそく飲まさないければならないので、消毒の炭火をおこしていたが、乳の瓶を明りに透しちよいと眉をしがめた。

「これは腐っている……」

「そんなことはない。しばって直ぐだと言っていたよ。」

「いえ、これをご覧なさい、ほら、滓がたまつてどろどろしているでしょう。これを飲ませたらすぐ又不良くなりますよ。」

「困ったなア、あんなに苦勞をしてとつて来たのに。」

そのとき障子のうちに寝そべっていた奥さんと、座敷中を取り散らしてあつたのを私は思い出し、不愉快になった。

「動坂はどうだろう？」

「でも此方こちらにきめたのに、今さら行けた義理ではありません。」

「義理なぞ言つて居られない時だから関わないじゃないか。」

「向うでは最うよその子に与っているんだそうですよ。」

「じゃ牛乳にするか。」

「そうするより為様がありませんわ。」

樋口さんに話しにやると、つなぎにはそれでもよいが、ぜひ乳母をさがしたらよいと言つて来た。

「こんどは乳母を国の方へ言つてやつて見よう。ひよつとすると質のよいのが居るかも知れない。」

「え、それがよござんすね。」

私はさつそく国へ手紙をかいた。すぐ搜して呉れるように頼んだ。——晩、或る友人が来て、山羊の乳というものは大へんよいそうだと話した。色が白くなるし營養も多いとのことだった。さつそく樋口さんに話しすると、牛乳よりよいかも知れないと言つてくれたので、田端のガードのそばにある山羊舎へ平林が毎日とりに行くことになった。幸さいわいに赤児は、やぎ乳を好すいた。みんなは吻ほっと一ト安堵をした。生れてからずっと腹をコワしていた赤児は、やつとすこしばかり腹の方がなおりかかった。

下田端の方へは、礼をもたせ断りにやつた。そのときも膏気のない足の裏を私はさびしく思い出した。——国から乳母は一人もないと返事をしてきた。搜していたのか居なかったのか、腹立たしかつた。

秋、写真を二枚撮った。夏がおもちやを持って踊って見せると、にっと微笑つたところを写した。国の母親と妻のさとへ一枚ずつ送った。国の母親はそれを毎日抱いて寝ていると書いてよこした。愛憎のはげしい母親が、そういう優しい心になってくれたのを喜んだ。——すこし咳をすると、すぐ樋口さんと呼んだ。

「赤児よりかあんたがたが、神経質になるからいかん。」

肥つた先生は、そういうとわたしと妻とに、或る程度まで打つちやつておくようにと言つた。わたしは外からかえるとすぐ赤児の顔を、その柔らかい頬をつま抓んでみなければ、書齋へはいらなかつた。その抓み方が痛そうだと、女はよく抗議を言つた。

「可哀そうに、そんな手荒いことなぞをして。」

「ほら、こうしてやると微笑つているじやないか。ツマリこういう愛撫の方法もあることを知らないか。」

実際、赤児は、くすぐられたようで、いつもよく微笑つた。電燈を置くために作らせた紫檀したんの台が、書齋の机のわきに晩になると置いてあつた。その上を叩くことを赤児はすいた。とんとんという工合に——書きものをしてるときに室へやへはいられると私は眉をしがめ、それによつて妻は黙つて赤児を抱いたまま、台を叩かないで出てゆかなければならな

かった。そういうときあとで氣附いて、わざわざ叩かせに呼びに行ったりした。そうすることによって私自身の氣を柔げることができたからである。

寒いのに赤児は、正月を迎えた。みんな雑煮をたべ、

「よい正月だ。」と言った。そのたびに自分がこうして正月を自分の子どもと一しよにすることを、珍らしいものに感じた。荒壁の凍てた寒い街裏の部屋にいた私は、よくその震えを振りかえつてはぞつとした。——大寒も過んだ或日、夏がくらい咳を一つした。夕方も勝手の方でつづけさまにしていた。

「あれは風邪をひいているから、子どもを抱かせてはいけない。」

妻にその注意をしているとき、夏は、赤児を抱いていたから、わたしはすぐ赤児をもぎ取るように抱いた。そして妻にわたした。その晩、赤児は咳をした。二つ三つ続けているうち、わたしは真青になった。

「しまった。うつったぞ。」

「どうもそうらしいんですね、こまった事をした。」

熱を計ってみると八度五分あった。それに不思議なことには、咳をするたびにぜいぜい苦しそうに息を切らすことだった。今夜はおそいから、明朝早く樋口さんと呼ぶことにし、

水枕をしかせた。

朝になつても熱が下りず、樋口さんは、風邪だと言ひ、それほど心配することはないと言つた。私だちは氷で冷した。——が三日経ち四日経つても、まだ熱が下りずに、咳がづづいた。ぜいぜいというのは喘^{ぜんそく}息があり、痰^{たん}が、切れないから苦しいのだと言つた。

それから二日経つた。樋口さんは頭をひねつた。

「本郷の写野さんに診てもらつて下さい。どうも氣になりますから。」

樋口さんは「わしは他のお医者さんと立ち会うことは平氣です。わしばかりでは診られないところもあるから、却つて立ち会つてもらつた方があなた方がご安心でしょうから。」と、わけもなくさういうと、一向そんなことに関わらない顔をした。

「ではさういうことに願ひたいものです。」

無理もないことだと思ひ、すぐ写野さんへ電話をかけ、看護婦にも来てもらうことにした。その晩から赤児は、目に見えて苦しさにぜいぜいやつた。「こんなことで死なせるものか。」という腹が引締つて私にあつた。

それに乳だけは順調に、さういう苦しいなかでも飲んだので、その方で切りぬけられると思へた。けれども熱がしつこく降りなかつた。上る一方だつた。

写野さんがくると、すぐ厚みにきせた着物をゆるめ、幸からしの湿布を背中にした。が、十分もしたが反応がなかった。わたしは、掌の上にある時計を見詰めた。三分経った。からしを剥はいで見ると、赤い反応が皮膚の上に出て来た。

「これが出ないと、ちよいと困るんだ。」

写野さんはこういうと、障子に布を覆うこと、吸入は二ふタとところにやることなどを注意した。樋口さんは、七本目の注射を用意して立っていた。

「酸素饑きが餓という状態ですな。」

写野さんは、これだけ言うのと、無駄をいわずに、座を立とうとした。この人は技術で病気に向う人だと思った。樋口さんは情熱で病気に對う人と思った。

「大丈夫でしょうか。ああも悪いとは気がつかなかったのです。」

私は新しく驚いて、写野さんの少し気取ったような、しかし自信の強い広い額を見あげた。

「からの反応が遅かったからちよいと心配はしました。しかし手当に残っていたものがありましたから……。」

そういうと、すぐ帰ってしまった。どこか重々しく一流の氣稟きひんをもっていた。わたしは

写野さんに見てもらったことを喜んだ。そして信じた。

吸入器の一つは伊織のおばさんが持ち、他の一つは車やの鈴木が水をさし、妻と看護婦が交る交る酸素吸入の口を向けた。炭火を起したりつぐために夏は忙しかった。夜中に、も一人看護婦が来た。吸入の霧のなかで、赤児はぜいぜい苦しうに空気が足りなそうに喘いだ。^{あえ}わたしは病室と書斎とを行ったり来たりしながら、玄関の下駄を一ト隅によせたりするような、へんな真似をした。

赤児は、わたしも妻も茶目であるにかかわらず、黒いつやつやした瞳をしていた。それがおつやつやくセルロイドのように光つて、熱で、悲しそうに動いてみえた。

「しつかりしろ、死ぬには早いぞ。」

わたしはそういうと、赤児の名をよんだ。あたりは吸入の霧で、ほとんど雫しずくが天井から下ちているような気がした。糊のしめった看護婦の白衣がしつとりしていた。妻の髪にも吸入の露があつた。みな勇ましそうに働いた。

「今夜のうちに熱を下げなければなりません。」

妻は、半分気狂いのようになり、吸入が空つたとか、炭が足りないとか言った。実際今夜しくじつたら取り返しがつかないと、私も頭に熱がさして来た。

「三十八度に下った、下った。」

妻は、夜明方になり、そう叫びながら私の寝ているところへ来て言った。わたしは飛び起き、赤児の顔をさしのぞくとやはり苦しそうにハアハア言っている。

「この容子ようすですと朝までに、もつと下るでしょう。」

看護婦が見当をつけ、私と妻とに安心をさせようとした。が、酸素の鉄管のからばかりがたまり、もう次ぎの分がなかった。

「困った。宮川病院を起したらどうだ。」

すぐ近くに、去年私が入院したそれがあるので、夏が馳かけ出して行った。

「起きなかつたら、石で門を叩け。」

そういううちにも、酸素は全くきれ、きゆうに室内がその水を潜くぐらせる音が絶えてしまったので、ひっそりした、その寂ひっそりそりした感じは、激しい不安を私に与えた。

「何をしているんだろう。」

私は気が気でなかった。「ちよいと行って来る。」そういうと、すぐ通りへ出、病院へ走った。病院の白い門の前に、夜明けがたの白っぽい門がみえ、夏がぼんやり黒ずんで立った。

「オイ、起きたか。」

近づくとは私はそう叫んだ。

「ええ、いま開けていらつしやるところです。」

間もなく、ぎいと門の開く音がした。私は夏をそっち退けにし、酸素を貸してくれるように頼んだ。

「事務のものも居ないものですから。」

下働きが睡そうにそう云って、すぐ出してくれそうもなかった。

「酸素のあるところを知っていますか。君は。」

「ええ、そりや存じて居ります。」

「じゃ僕が持つて行く、そうして明日院長に話すから渡してくれたまえ。今はぐずぐず言つて居られないから。」

「困りますわ。そんなこと。」

「責任は僕が負う。早くして下さい。死にかかっている病人があるんだ。」

私は、下働きが薬局へ這入ると、そこへもずうずう凶々しく這入りこんで、一本だけ手に抱えた。時計が寂しくなっている。

「明日来て話すから。」

そういうと私はすぐ家へかえった。門の前に看護婦が出て私のかえるのを待った。みんなは景氣のよい音をきくと、ほっと一ト息ついた。

「なかなか起きて呉れないんですもの。」

夏は、ぶつぶつ言っていた。

夜が明けると、赤児がすやすや睡っていた。樋口さんが朝飯前にやって来た。

「すこし熱は降ったようだ。」

水銀を振りながら、「赤児はすぐ悪くなるんだから安心がならない。」と言った。

「いつか僕らがあまり神経質過ぎるって言ったじゃありませんか。」

「そんなことを言いましたか、いや、それで赤児の場合は結構ですよ。けれども何んでもないときに騒がれると困る。」

そういうと、おひるころに又来るからと言い、「この薦つたはぜひ分けて貰いたいですな。」と夏に言つて出て行った。

「気さくない人ですね。一日に三度も来て下さるんですよ。」

妻は、看護婦にそう話した。樋口さんとは私が田端へきて八年にもなる知合いであった。

翌日、写野さんがやってくると、樋口さんに、薬の方のことを言い、

「もう取り止めたようですね。」

そう静かに言った。危険期を越えているとも言った。が、まだまだ安心はできない、どういう風にかわるかも知れないとも云った。私は写野さんを信じた。

「下手なことをやると、書かれるからな。」

そう樋口さんを振りかえった。この前、やはり書きものをしている人の子供を見、書かれたと言った。

「医者にだってどうにもならない場合があるものですよ。」

私はそれに同感した。あんなに善くしてくれたのに、書くなぞとは私は思いもよらなかった。

医者は、毎日、写野さんと樋口さんとが立ち会って呉れ、一週間目になった。

「もう大丈夫だ。何しろ乳を飲むから都合がよい。」

写野さんは、初めてハッキリ言ってくれ、私だけは安心した。看護婦も一人だけにした。気がつくつくと、夏も妻もみんな一週間のまにすっかり憔悴やつれてしまった、それでも妻は気ばかり立っていた。

「一時どうなるかと思いましたがよ。やれやれ。」

妻は、やっと帯を解いてねむった。その間じゆう私はひとりでゆっくり睡っていた。自分だけが安眠するのに気がひけたが、おれは仕事はあるし、一ト晩でもねむらないと、すぐからだを遣られるからという口実をつくった。「あなたは眠らないとあとあとに支えるさしつかから。」と、妻もそう言つて気づかないでいたが、あまり自分勝手にエゴイストで、きまりの悪い思いを心に感じていた。

樋口さんは、やはり一日に三度ずつ来てくれた。生れるとすぐ赤児を見ていた医者は、よくこんなことを言つた。

「これまでに苦心してきたんだから、もしものことがあつてはあなた方に顔向けがなりませんからね。」

正直一図で善良な樋口さんは、或る朝、晴れた座敷へこぼれる日ざしに、もうセルの服を着込んで茶をすすりながら、はればれした表情をした。

「こんどはいろいろどうも……。」

そう私はいさつをした。

「たいがい写野さんとも意見は同じかつたんですよ。あの方はなかなか目利きですからね

樋口さんは、そういうと立って帰って行った。私は樋口さんのむしろ無邪気なところを
ほほえ 微笑んで味あじわうことができ、赤児はすこしずつ笑うようになった。

三

誕生日が過ぎても、まだ歯がでなかったばかりでなく、這うこともしなかった。やっと抱き上げると、足に手を当ててやると立てたのが、このごろになって足を曲げ、触ると痛そうに泣いた。

「この子はいったいどうしたんでしょうね。足が立たなくなっただの。見て下さい。」
 そう言えば、足をくの字に曲げて、さわると泣いた。「ともかく写野さんへ行つて見てもらうとよいな。」

「え、そうしましょう。」
 写野から俵でかえると、妻は、青い顔をしていた。

「楽山堂病院の整形外科へ紹介をかいでもらいましたの、写野さんでも専門ちがいで分りか

ねるそうです。」

「樂山堂病院つて遠いんじゃないか。電車じゃあだめだし。」

「俾にします。」

「そう、じゃ行つてくるとよい。」

妻は、すぐ下町へでかけた。まだ、なおったばかりなのにあんなに連れてあるいてよいか知らと思えたが、あのままにして置けば足の方の病気が固まっても困るといふ考えが私にあつた。帰えると、

「この子は神経が立っていて足の筋が一本引き釣っているんだそうです。マッサージするより外に治療の仕方がないつて、そうして頂いて参りました。まあ、随分泣きましてね。」

「そうだろう、がこんな赤児の足なんか揉んで、あとで何かにさわりはしないかな。門の前まで聞えるように泣いたりなぞしては、心臓にさわりはしないか。」

「それは丈夫だと言つていました。病気で泣くんじやないつて——そして此こゝな麼に神経の立つている子は珍らしいつて言いましたよ。」

「そうか。」

私はしかしこの樂山堂行きは、なんだか気がすすまなかつた。が、もう治療にかかつて

いるのだから、それを歇めるわけに行かなかつたが、隔日に俣が門の前へ梶をおろし、赤児を抱いた女の姿をみると、悒うつとしい気がした。わけても赤児の泣きさけぶときは、可哀相な気もした、

「きようは休んだらどうか。風もすこし寒いし泣くから……。」

そう言つても、隔日だから一日遅れると、それだけ治療が遅れると言つて聞かなかつた。いつたいに赤児に注射するときでも、女はそれを平気な顔で眺め、こうすれば療なるものだと信じているらしかつた。が、私は注射のときはこの間の大患のときも、なるべく病室にいないで書齋に坐つて、その赤児の泣声がきゆうに苦痛のために止められ、聽やがて泣き出すときまで、あぶら汗が滲みながれたほど、赤児の身になつて見て、ツラかつた。

「あんまり泣くものですから、よその病室からみんな集つてきて覗きにくるほどですよ。ほんとにこんな大きい声を出す子はありません。」

病院からかえつた女は、いくらか足が楽になつたらしいと言つて、赤児の足をみせた。わずかしかかない肉附きを揉むなんて、やはり私は信じかねた。

「いまに後悔することがあつても、おれは知らない。あそこへ連れてゆくのはどうも厭な気がする。」

「だって仕様がありません。」

「全く仕様がないことだ。」

私は黙り込んでしまい、室を立つた。赤児はすこしずつ肉がついたようにも見え、瘠せたようにも見えた。食事をするとき、ああと言い、何かをつかもうとした。赤児がそばへきていると、食事がウマかった。自分のようなものにもこんな子が生れたのだという、あたり前の考えが珍らしく、きめ細かい人間の内側のちからを感じた。

緑が深くなると、向いの画家のKさんの家でも、おとなりの早瀬さんでも、気候が不順だからと、鎌倉と房州とへ子供をつれ転地をした。どちらにも弱い子があつたが、それよりもずっと家の赤児はよわかつた。そういう隣近所のことを聞いただけでも、東京に居残っているとは病気になるいそうで心寂しかつた。

或晩、地震が来た。恐ろしい音が屋内をまんどり打つた。ちようと茶をのんでいたのだが、私は機械的に庭へ飛び出した。そこに石燈籠があつたので、台笠が落ちはしないかとほのしろ灰白ほのしろい石を見詰めていた。

「あ、恐かつた。」

そういう妻は、ちゃんと赤児を抱き、赤児は、くろぐろした瞳をくらやみのなかにツヤ

消しをしたその光をふくみ浮していた。私はそのとき赤児よりも自分がさきに飛び出したことに、自分自身を不愉快に感じた。

「思わず知らず抱いて出たんですよ。何も考える間もないんですもの。」

妻は、しずまった空に樹の尖端せんたんがまた震えているのを見ながらそう云って、私が一人で飛び出したことを、べつに何とも言わなかった。私は赤児の瞳を見た。そしてやはり私自身をイヤな感じをもつて考えた。

「いやな気もちだ。」

「どうして?」

「お前よりさきにあいつを抱いて出なかつたことが、イヤな気もちだというのだ。お前はなぜおれに抱いて下さいって頼まなんだ。」

「そんな間なんてあるものですか。母親のそれが役目なんです。」

「それではお前だけの子か。」

私は負けたのを知りながら、どうも子供は生せい長ちやうするまで、母親のものらしく思えた。父親はそれを監視しているだけのものか。そうも考えられた。

「自分がコワイからさきにあなたは飛び出した。」

「あ、飛び出した。」

「わたしはあとからコワかったんですの。子どもを抱いて出たあとでね。」

「うむ。」

私は黙ってしまった。やはり凝り固まった自分ばかりを考えている私自身に、不愉快をかさねた。

樹の青みが深くなると、発育の遅れた赤児を抱いた夏や妻が、よく庭へでているとき、不思議に赤児は、空の方をよく見詰めていた。そばへ寄って透してみると、空ではない、樹でもない、何か木の葉が枝端れにひらひら舞うている一枚を、珍らしそうに眺めているのだった。

「お前をよく知っているらしいが、どうもおれというものを確かに知っていないらしい。つまりおれが父親だということを、そういう意味をはなれてもお前とくらべると、赤児は全で他人のような顔をしてみているように思われる。」

「そうでしょうかしら、しかし能く知^よっているらしいんですよ、ほら、お父さんですよ、分^よつて？」

女は、そう言って赤児をさしつけても、私より夏の方へ行こうとした。女は、なるべく

私に馴染ませようとしても、駄目だった。しかし何処かに私を見る目と、よその人を見る目とに相違があつた。柔らかな馴れた視線があつた。

国から母親が来、二週間ばかりすると帰つた。その日、はじめて電車に乗せ、晩方上野まで行つたが、赤児は電車の音や騒々しい人込みに怖れた。田端の静かな家のまわりだけしか知らなかつた赤児は、眼を円め、びくびくさせ、しまいに泣き出してしまつた。刺戟が劇し過ぎるように思われた。熱でも出ると大変だと思い、自動車ですぐ帰つた。

あくる日、樋口さんは、ちよいと風邪を冒いたのだと言ひその手当をしたが、「どうも弱い子ですね。上野まで出て、コレだから大変だ。」と云つた。赤児というものは、一週間病気をすれば、一週間だけ発育が遅れるということも、話に出た。そういえば、うちの赤児は、ふつうの赤児よりか半年遅れていた。歯も出なかつたし、這うことも、抱いても足が立たなかつた。が、私はその黒い瞳と、私に似もつかない美しい整うた顔をしているのが得意だつた。

田舎にいる杉原という詩人も、もう父親になつていたが、やって来ると、すぐ赤児の綺りょうなほめた。

「うちの子は色が黒くて、てんで話にならない、これは傑作だ。」

杉原が、そういうと私は、赤児が私似であるか、それとも女に似ているかと尋ねて見た。
「奥さんに似ている。」と言った。

「しかし半分くらい似ていないか。」

「そういえば少し似ている。」

とも言った。

実際赤児の顔ほど、ふしぎに両親の顔をうつし出しているものはなかった。その表情の動きのなかにも、微かすかながら父母の何ものかが漂うているのだった。そういう判りきったことを執念しつこく私の心に対し、恐ろしいほど凝視するような気もちだった。

「こんど又できるんだ。こまった。鬼灯ほおずきの根でも飲まそうかと思うんだ。」

「よせ、そんなことは！」

「でもおれは子供どもというものは、そう可愛くないんだ。少しも愛情がうつらないんだ。」

「どうしてだろう？」

私には杉原のそういう気もちが分らなかつた。そのくせ彼れは子供どものお弄品を街か

ら包にして持つて、いつも田舎へかえった。

「第一綺麗がわるい——。」

美しいものに溺れる杉原は、そういう単純なことにも、自分のすききらいを言い張った。それにしても可愛くないなぞとは、どうしても思われなかった。

「抱いたりなんかするだろう。」

「それは抱いてもやるさ、しかしどうも君くらいに愛情がおこらない。君はマルで夢中だ。悪党のくせによく可愛がつているから感心だ。」

杉原はこういうと、それが私だけの前でつくろつて言っているのではないように思われた。かれは優しい美しいものには、それと同じ柔らかい気もちになることができたが、そうでないものには、かれらしい病的な愠としい気分になるらしかった。

が、赤児は、一日ずつ咳をしつづけた。それに喘息の気もありそうであったが、いつもの事で、気かけようもなく、毎日、医者は一度ずつ来てくれた。玄関に靴音がし、そうしてすぐ樋口さんの白い夏服をみると、赤児は、すぐ直覺的に泣き出した。

「どうも困るなア、そう嫌われてしまつては！」

樋口さんはしまいに裏木戸からこつそり庭へ廻り、そうして、

「どうですか、寝ていますか。」と、こ声でいい光る夏服をみせまいとした。そういう注意深いところも、何んだか私にはたいへん好ましかった。

「目をさましていますよ。そつとして。」

「咳は？」

「ときどき出ます。それにぜいぜいやるんです。」

「啖がきれないんでしょう。啖のきれる薬を上げましょう。じゃ失礼。」

樋口さんは、そういうと又裏木戸からかえつて行った。――が、赤児は、それから二日たつと、青いダルい顔をし、しきりに咳をしはじめた。

その朝、女は私の部屋へきて言った。

「おとなりの早瀬の奥さんがね。どうも坊ちゃんおおごとは百日咳らしいと言って、いまのうちに注射をしておもらいなさい、そうでないと大事おおごとになるから……それに早瀬の御主人もやはりそうらしいって、見るに見かねて、さし出がましいけれどもツて言っていらいっしやいましたよ。そういえば、どうもそうらしいうござんすね。」

早瀬さんとは、垣どなりで、よく聞くとやはり同じい郷里の人だった。それにもう三人も子供をそだてた経験から、その注意は私の胸にぎくりと来た。

「どうもそうらしい。いいことを教えてもらった。」

私は感謝し、すぐ医者に注射をしてもらったが、「いまから百日咳になりかかろうとしているのだ。」樋口も写野も言ってくれた。何となく大きい困難を前に払ってしまったように嬉しかった。

が、どういふものか咳が発作的に來た。一日に一度ずつくらいに——しかしそういうことに馴れているので、気にしながらも、ただ服薬だけさせた、樋口さんも大したことではないと言っていた。しかし顔の色はだんだんに悪くなり、手足がよく冷え、すこしでも抱いていないと火のつくように泣き立った。

或る朝、夏は赤児を抱いたまま、これも顔色を変えながら言った。

「いま大へん咳をなすった、そしてからだをブルブル震わせなさるんですもの、びっくりしてしまいました——。」

「ブルブル震わせた？」

妻はすぐ抱きとつたが、しかし別にかわりはなかった。あやして見ると微笑い、ううと言った。

「しかし顔色がわるいな。どうも気になる青さだ。」

私は赤児をさしのぞき、いくらか力なさそうにしている瞳の色を見た。何となく寂しい気がした。赤児のわるい顔色と勢のない眼のいろは、いつも私にイヤな寂しい気をおこさせた。それがいつもよりずっと変な気にならせた。

「足をみる。」

「冷えています。けれどもほら微笑つていきましょう。」

「床にねかしておいたらどう。」

「下に置くと泣き出すのです。泣くと咳が出てせいせい遣るんです。」

「困ったな。どうすればいいんだか。」

やはり抱いているより外に仕方がなかった。気のせいか、唇の色まで、いつもより紅いところがなかった。医者には喘息の発作だと言ひ、實際それ以外に何等の徴候とはなかったのである。

あやすと微笑い、山羊乳もいつもほど飲んだが、むやみに頭を振り、物憂そうにしていた。

或朝、妻は赤児を抱き、書齋へはいつて来た。いつものことなので、机の上から、わるい顔をしているのと、元気のなさそうなのを見た。

「豹、どうした、いいかげんに癒ってくれないと、みんなが困るぜ。」

私はそう言い、立って赤児をあやそうとしたが、妻は、ふとこんなことを言った。

「さんざん病気をしたあげくに、この子は死ぬんじゃないでしょうか。」

「そうお前は思うか。」

「ええ、どうもそんな気がしてなりませんの。」

私は黙っていたが、「いまトラれてたまるか。」と少し腹立つような声で言った。これまで育ててきて、死なせるなんてことが有り得ようかとも思った。死んでも引き戻してやるとも言ったが、空疎なことを言ったので心寂しかった。

「そんな考えをもたない方がよいよ、こうして、ほら、この通りにぴんぴんしているんだから、なア、豹。」

私は、手をとって見たとき、あまり冷くなっているのに、驚いた。足も、きのうよりも酷かった。

「どうもおかしい、こんなに手足が冷えている。」

「そうね、医者を呼びにやりましょうか。」

「すぐに呼ぶとよい、いや、おれが電話をかけに行ってくる。」

私はすぐ宮川病院へ、電話をかけに出かけた。電話をめったにかけない私は、あわてて番号を間違わせ、うまく言い当てたときに、交換手が出るときゆうに番号が吃^{ども}つて言えなかった。そういうことを幾度も繰り返しているうち、ますます電話をかけ違えてしまった。

「……………」

黙っているうち、向うではどんどん切ってしまった。これでは遅れるばかりだと、すぐ家へかえり使^{つかい}を樋口さんへ出した。午前一杯医者はこなかった。その間に二度発作があり、赤児は、ああ……という咳のあと息をひいては苦しんで、済むとハアハアと言った。

「これはいけない。これは大^{だい}ぶ変^{へん}ってきたぞ。」

背中に私はぞくぞくした寒さを感じ、又使を出した、が出ちがって来なかった。手も足も冷たくなった。しかしれいの黒い瞳はやはり静かにちからな顔のなかで、くろぐろと光っていた。

「豹、豹。」

妻はうろろうとした声で呼んだ。

「早く医者がきてくれるといいんだが……………」

そこへ樋口さんがきたが、大分長く考えていたが、

「心臓がわるくなっている……こりや大変だ。」

そういうと、さっそく注射をし、「こんなになっているとは知らなんだ。とにかく写野さんに見せておく方がいいですね。」と言った。

「わたしもそう思っていたんです。」

手頼りにならない気がして、私は樋口さんをぼんやり眺めた。急にきたと云えば急だったし、ゆつくり来たといえ、ずっとさきからこの傾きがあつたのだ。が、私はいつもの発作だから大したことはあるまいと思っていた。

写野さんの電話が通じないので、使を出したのが四時ころで、外出していて急の間にあわないらしかつた。私だけは苛々した。樋口さんも手のつけようもないらしく、一ト先ず帰って、電話で打合せをしてから、一しよに来ると云った。

夕方、客があり話していると、妻は、私を呼んだ。その声はいつもより違っているので、飛んで行つた。そのとき赤児は、第三回目の劇しい咳と引息がちようで驚がのように泣いた。ガアガアアと息をあえいだ。

「どんなに苦しいか知れない。」

私はひとり言をいい、そして手のつけようもなかった。

「医者が来ない。困った。」

私たちは、腹のなかまであぶらを流す思いをつづけた。晩の八時になった。何という変りようであろう、赤児は、もう床にはいったまま、いつもそうする子でないのに、おとなしくぐったりしていた。私はからだじゆうの毛あなに、ぞくぞくする懸命な異体のわからない昂奮こうふんをかんじた。

「夏、表へ出て見ろ、俵が来ないか。」

夏はそとへ出たが、すぐ引きかえし、

「お見えになりません。」と、これも息を切らした。とにかくおれは落着いていなければいけない、そう心を引き締めた。

「大丈夫でしようか。」

「さあ。」

私はそれきり何も言わなかった。

「潜りがあいた。医者だ。」

そういうと、私はすぐ書斎へ行き、机のわきに落ちつき、どす黒い姿を凝り固まらせ、あわてたところを見せまいと、煙草に火をつけた。

写野さんへは、病状を話した。そして急にきたものらしいと付け加え、「どうも手足が冷え、へんだと思つていたんですが。」と言った。

写野さんは、私の説明をこの人がよくするように、考え考え、そうして大概の見当が頭でつきそうな時分に、じゃ一つ見ましようと思つたと立ち上つた。

写野さんは、すぐ看護婦に「今夜は三十分ごとに注射しなければいけない。」と言つたときに、樋口さんはそれを用意して一本打つた。が、又一本打つた。そして写野さんは赤児の頭の枕の下へ手を入れ、その頭を四寸ばかり高めた。

「辛しの湿布だ。それから湯たんぼで手と足を温めるんだ。」

「^{しゃが}踏み込んでそういうと、辛しの湿布がきたが、布だったので、

「紙にするんだ。」と言つた。

赤児はハアハアと言ひ、くるしがつた。湿布をした。十分経つた。肱^{ひじ}が脚の下までしか来ないで、手首は寂としてびくともうごかなかつた。「手足が冷える冷えると思つていたが、やはりいけなかつたんだ。」と私は顫^{ふる}えながら思つた。

「これは危ない!」

写野さんは、へいぜいとは違つた声でそう樋口さんに言つた。赤児の目が釣り出した。

そして息がきこえなかった。室じゆうに音というものがなかった。

「お父さん、今ですよ。」と妻が言った。

写野さんが人工呼吸をやった。汗とあぶらが赤児の肌身と写野さんの手のひらにちやついた。私は生れてはじめて人工呼吸を見たので、それでなくとも、ああすれば助かるかと思つた。

「樋口君、かわつてくれたまえ。」

そう写野さんが言つたときには、妻は泣き出した。写野さんは赤児の臉をめぐり、電燈をよせて見た。あんなに電燈の光をよせたらまぶしいだろうと私はふと思つた。それと同じにこの子のくろぐろした瞳は見おさめであつた。

部屋の隅で、夏が泣き出した。声を挙げしばらく妻も泣きやまなかつた。

「お父さん、最ういちど抱いてやってください。」

ぼんやりしている私に、目を閉じた子を妻はわたそうとした。

「あ、抱いてやるとも。」

そう言つた私は、抱き取ると、頭がぐなくなになつて、重かつた。もつと静かに抱けばよいと思つているうち、全く死んだなと思つた。それまで私は何という呆ぼんやりした、うつ

けた気持ちでいたことであろう。——こんどは、床の上にそつと置いた。

「どうかあちらへ。」

私は書齋へ二人の医者をおんないした。樋口さんは泣いた目をしていて。あれほど永い間診ていてくれたのだからと、そういうことも嬉しかった。

「どうも惜しいことをしました。」

写野さんは、鞆を手にとりながら言った。

「たびたびお世話になりました。」

妻もそこへ出て挨拶をした。玄関へ医者を送ると、静かに俵に乗るけはいがした。何も尋ねるな、そう考えた。

「わたしもう御用事がございませんから。」

看護婦もかえった。医者がきて四十分して赤児が死んだのだ。

赤児の顔の上に清い布が掛けられた。それを見い見い、やはり死んだかと、信じかねた。「今死のうとする赤児に灌腸するのはよくないじゃないか。あのとき呼吸が上の方へグツと詰ったような気がした。」私はあきらめ兼ねてそう妻に言った。

「いえ、ああして助かることがあるのです。わるいことはなかつたのです。」

妻は、医者のかしたことの、最も正しいことであることを言った。私は黙り込んだ。が、死児を見ると、どうも諦めかねた。怨むまいと思うが怨むぞと、そう誰に向ってか絶えずつぶやいている、あさましい私自身をどうすることもできなかつた。

四

初めての経験で何からしてよいか分らなかつたが、隣の早瀬さんや根岸のおばさんなどが来てくれ、車やさんと植市とが使あるきとお葬いの手配りをしてくれた。

棺に入れるとき、私達はもう一度抱いてやったが、やや硬張つたそのからだを持ち、閉じられた眼をみていると、まだすやすやと睡っているように思われた。が、ふしぎなことには、その死顔がやや暗色をおびているせいか、二つばかり急な時間のあいだに歳をとっているように、マせて見えた。死児というものは、こんなに歳とって見せるものかとも思われた。

「靴下も入れてやりましょう、それから帽子も、おもちゃも。」

まだ一度も穿いたことのない毛糸の靴下をはかせ、入れられるだけのお用品を入れた。

笛も太鼓も入れた。

どれを見ても女達は泣いた。私はすこし変な気がしてくると巻煙草まきたばこを口に咥くわえた。歯の間がすくと息がぬけるので、涙ぐむようなことがなかった。——墓地は、田端の大龍寺にした。子規の墓があり静かだったし、近くておりおり行けるような気がしたからである。「あそこならおれも埋められてもよい。」そう言い、妻にイヤがられた。——晴れた翌朝私だけ家にのこり、友人も沢山行つて葬いが済んだ晩、国から妻の姉が来た。

灰葬には、私、妻、早瀬のおくさん、妻の姉、夏なぞが行つた。三河島の河ぶちの暗い溝水に沿い、俣が走つた。猫入らずの製造所の板塀いたべいにその広告文字のかかれているのが、目を惹いた。

骨はかなりな量があつた。銀杏の実のような膝がしらや、パイプのような細い足の骨などが、竹箸のさきに触れた。眼を泣き腫はらせた妻は、箸のさきに小さい堅いものを引っかけながら、

「歯が出ない出ないと言つていたのに、ほら、こんなに揃っている。」

そう言い、それを拾いはじめた。

「はぐきの中に埋つていた歯は焼いても碎こわれないんです。」

隠亡おんぼうは、自分でも馴れた手付で、その幾つかを拾った。

「歯がないないって言っていたのに。」女はそればかり言い、はぐきを破って出るちからがなかったのだと、口惜しそうに繰り返した。小さい素焼の壺に入れ、みんなは又俵に乗った。

道路の曲り角に、床屋の白服をきた若者が、黒いものを棒のさきで衝ツつきながら、折お柄り正面から来た駄馬わだちの轍ひに轢かそうとした。輪はごつとりと小石を乗り上げ、それを迂ろうとしたときに、若者は小さい黒いものをひよいと棒切れで追った。が、黒い小さい生きものは、そのはずみに二三寸ばかり先さきへ走ったあとへ、輪がひと廻りし、私の俵が通ったのである。鼠はうまく生きのがれ、何となく私はやすらかな心地がした。

「イヤな事をする。」

しばらく白い乾いた道路に震えている影が目を去らずにいて、不愉快だった。

私たちは毎日ぼんやりして、女は女で何をするにも元氣のない顔をしていた。子守唄が一年ばかりつづいたあとで、その日から絶えてしまったので、これも家をひっそりさせるに充分だった。同じことを繰り返し、あきらめかねていた。

或朝、私は門の前へ出ると、そこに早瀬さんの三人の子供があそんでいた。「ちよいと入らっしやい、抱いてあげるから。」そう四つの子にいうと、はずかしそうに垣根にからだを擦りよせ躊躇ためらったが、思い切ったように走って来た。

「なかなか重いな。つぎはあなただ。」

その上の子も、妹のようにしなを作ったが、そうされるのが嬉しいのか、これも走ってきて抱かれた。

「こんどは兄さんの方だ。」

一番兄は七つだった。重かった。と、きゆうにそんな事をしている間に、私はむやみに悲しくなつて来て、潜り門から家へ飛び込んだ。何という寂しい気もちだか。——そしてしばらくその気もちが離れなかった。

妻は妻で、よその子さえみれば「ああしてみんな達者なのに自宅の子だけどうしてあんなに弱かったのでしょうか。」と、口説いた。

「おれはよその子を見ても、あれは余所の子でおれの子じゃないと思うと、何んでもなくなるのだ。」

そう私は言ったが、やはりそればかりでない気もした。そして童話など書くことを頼ま

れると、よその子の喜ぶものなぞ書いていられるかとも、あさましく腹立たしかった。二人とも、ひまさえあれば溜息をついた。

「何も面白くない。」

女は女でそう言い、朝早く大龍寺へ参りに出かけた。「何が面白いことがあるものか。」私は不気嫌に毎日ぼんやり暮した。——或る知人に七人の子供があつたのに、長女をこの春亡くした。すると或る人が、「君は七人もあるんだから一人くらい亡くしても関わらないだろう。」と言つた。するとその知人は「七人もあるからなおその一人を欠かしたくないのだ。」と言つたそうだ。私はその心もちが分つた。

坂の上にいる或る彫刻をやる知り合いが、ぼんやりうつけ者のように夕方あるいている私にこう言つた。

「またコサえるさ。」

私はあたまがぐらぐらし、やつと口がきけたくらいだった。

「あのとおりの顔がまたと生れてくるとでも君は思っているのか。」

そういうとこの男の子どもも、何かのついでに死んでくれればよいとまで、その瞬間にかつとした。そうなればこんな不用意な口をきくまいと思われたからである。「またおあ

とがあるだろうから……」そういう風に言われると私はさびしく黙った。しかしあの通りの顔は世界じゆうに一人もないぞという気がした。

妻が寺参りにでかけると、箆筒たんすの曳出しひきだのそばへ私はしばしば行こうとしては、ふいに立ち停まりあたりを見廻した。やはり静かな庭樹のかけが、障子に映り誰もいる筈はなかった。が、その白みある明るい光では、よく赤兎がしていた水枕のびちやびちやる音が、私の耳にきこえた。

「おれはいつたい何しにここへやって来たのだったか。」

私はひとりで呟やくと、曳出しの鍵に手をかけようとした。鍵は別の曳出しから取り出し、ひと廻りさせ、がっちりと開けたのである。そして私は手早くいろいろな品物や書類たまの累たまっている中から、手ざわりの角の荒い写真をつまみ出し、それを懐中にしまい曳出しをしめた。そういう感情には絶対にそれを人目にふれさせまいとする注意深さと、自分がそうすることによって妙な感情になるまいとする努力とが打ち合った。も一つは、そんなことをする詰らなさがたとえ人目にふれずについても自分の心になにか羞かしそうな妙にもに銜てらうようなうす痒さとが、かさなり合うのだった。

そして私はどかりとあぐらを組み、それを開いて眺めた。静かで快い気もちがした。よ

く泣いたとき煩うるさいと言ひ叱つてみたりしたことが、人並みにあんなに言うんじやなかったともツイ思い出された。誰でもみんなが持つおき雑ない感情がどやどやと足音をさせ、しばらく私をとりかこんでくるのが、何より嬉しかった。

私は間もなく写真をしまい込み、鍵をかけ室を出た。そういう、つまらない事をしたあとで、きゆうに蜂に刺されたように悲しくなつて了つた。そこらの畳をがりがり引掻き、どこか遠いところを呼んだら、何かが戻つて来そうな気がした。ああ耐らないという気がした。あのときどうにかならなかつたものか、とも思い、もつとさきに医者がきてくれればよかつたのに、そうしてそれを気づかずに居たのは何という馬鹿だつたらうと、私は文字通り畳をがりがりやつた。怨むまいと思ふが怨むぞと。頭があつくなり、かつとして気でも狂いそうになつた。

「この容子だとおれ自身あぶないぞ。」

そういう気もした。

お寺から妻がかえつて来ると、坐つてこう言つた。

「白いお骨の壺が三つならんでいたので、尋ねると去年の秋から順繰りに三人の子供が死んだ家があるんだそうです。二人目からそのおくさんがすこしずつ気がへんになり、三人

目が死んだときは、全く気がフレてしまつて、とうとうこの間田端の脳病院に入ったんですつて。何という話でしょう。」

私は黙つてきいていたが、そんなに死なれては気が違うのも当り前のように思われ、ならないのが不自然なように思われた。すくなくともそういう女はずうずうしいとも考えられた。

「^{もつとも}最な話だ。おれにしても少しはへんになる。」

妻は、しばらくしてから、又ぼんやり部屋へはいつて来、何もいわずにうろろろしていた。そして、

「子守唄もうたえないし……。」

ぼつんとそんなことをいう。

「何をつまらないことをいうんだ。……写真はちゃんと封をしておいたよ。見るとおたがいにいけないから。」

「え、見ませんとも、見たらそれこそ大へんです。」

実際、女はまだ一度も見ないらしかった。私がそれを好んで見、女はなるべく見ないようになっているお互いの気もちが、どういう風にそれをべつべつに考え違っているのかと、

おりおり私は考えた。がどこまで孰^{どち}らが真実であるかが分り兼ねるような気がした。——
ぼんやり食事をしていると、何かを考え出し、それをお互に悟られまいとするようなこと
が多く、箸をもったまま眼で庭をさぐり合うことがあった。そういうとき不思議にわずかの
間に遠い笛の音色をそらんじ、その消えてゆく尾について哀愁が起った。さまざま
音色の笛がいつも赤児の枕もとにおいてあったから、それが何処からか起ってくるような
気がした。

ちいちゃい童子^{どうじ}はいつも一人で歩き、持ちきれぬほど色彩のはげしい笛や太鼓や兎や犬
を抱え、菅で編んだ笠をかむり、足にはおぼえのある毛糸の靴下をはいていた。靴下はだ
いぶ擦り切れているのを見ると、よほど歩いたものらしく思われた。くろぐろした瞳はや
はり力なかつたが、その働きは四年も五年も一時に歳をとっているような、濃い悲しそ
うな色をたたえていたのである。

「お前はそうして歩きつづめているが、いったいどこへ出かけて行くんだね。どんなとこ
ろにあてがあるんだ。」

私は童子^{どうじ}に近^{ちか}より、そのあたりに手を置いたが、童子は私の目をながい間ながめ、そう
して初めて和^{なご}やかに微笑^{なご}って私の手にその手を結びつけ幾度か逡巡^{ためら}いいくらか羞かしそう

に口のうちに「お父さん」とそう呼びかけた。

「あてがないけれど、やはり此処ではじつとしていたより歩いた方がいいの。何がなし一日こうして歩いては少しずつ行くんだけれど、さっぱり分らない。」

「お前とおれのいるところは、よほど遠いような気がするね。おとうさんにはよくお前の顔がわかるが、そのようにお前にもよくおれの顔がわかるかね。ほんとにお前は其^{そこ}処にいるんだけれどね。」

童子は、まだ新しい菅笠をちよいと傾け、そして小さい荷物を石塊の上にそつと置いた。

「ええ、わたしにもよく分りますが、しかしおとうさんの向いに誰がいるのか、よくここからは見えないのです。」

「あれはお前のおかあさんさ。よくないね、もう忘れてしまつては？」

「いえ、ここからはよく見えない、声だけはするけれど。」

童子は、しばらくすると又あるき出して、荷物をかついで寂しい足音を立てて行くのである。

「もう少し話したらどうだね。お前のようにそんなにせかせかして行かなくともよいでは

ないか。」

「あなたたちはそうしてご飯をたべて居らっしゃればいいのです、ですけど此処ではそういう暢気なことをしてはいられないのです。」

「なぜだ。」

「なぜでもあなた方とわたくしとはもう別なものですから。」

童子は、すたすた歩き出し、あとをも振りかえろうとしなかった。私は目をすえ、見送っているうち、庭のあたりでこのごろ飼った河鹿かじかがしめやかに啼いた。

「啼きましたね。」

「ア、啼いた。」

私はふと思いかえしたように、女が箸を下におこうとするときに言った。

「あの子が死ぬ前の日に、（さんざんこの子は病氣してからわるくなるんじゃないか。）と言ったね。なぜああいうことを言ったのだ。あれは言いあてたようなものだ。」

「でもあのときは怎どうもあんな気がしてならなかったのです。言っちゃわるかったか知ら。」

「悪かった。へんにあの言葉があたまに残っていていけない。」

二人はまた黙ってしまった。食事はすんだが話をするでもなし、しないでもなしと云うような時間がみごもるように重くるしくなつて来ていた。……私はそれがほとんど随所で全くフイにいつでも歩いている童子の、定まらない足もとを見る事ができた。机のわきでも電車に乗っているときも、そうして外からかえつてきたときに出てくる女の肩の上にも、晩はわたしのすぐそばにも睡っているように思われた。

それが何事にもそのようであるように、私はここでいつもきれぎれな話をせずいられなかつた。も一つは日を経るにしたがつて童子は四歳にも五歳にもなり、脣もとが締まつて耳にも紅みがよけいにさして来たのである。そういう歳をとつてゆく童子の顔は、やはり不良い蒼い色はしていたが、したしそうによく綾あやして微笑つたときそのまま姿でいたのである。わけても鳥籠の下に、いつも妻や夏に抱かれては覗いていたように、私は机のわきから立つて、よくその赤い朱塗りの鳥籠をのぞいた。そこに小鳥のために入れられた水壺が、わずかばかり冷たそうな色をたたえ、そのうすい色をうつしていた。それを私と同じように童子の顔がさしのぞき、すばやい小鳥の羽搔きをながめていた。

「あれからお父さんはいつもこういう工合にすわり、さていつも元氣のないかおで何から何まで厭になつてしまったのさ、しかし段々考えるとお前はさきに死んでしまつて或いは

ひよつとするとよかつたかも知れない……。」「

そりやおとうさんのように長く生きているうちには、さまざま面白いこともあるが、それさえあの笛の音いろのように——（おまえは笛がよく鳴るかわりにすぐ消えやんでしまふことはよく知っているだろうね）——すぐあともなくなり、次から次へとつまらないことばかりが、そういうことを書いてある大きな書物があるとすれば、それと同じことばかりを繰り返しているようなものだ。だからお前があのように花につつまれて死んでしまったことが、お前のきらいなことに会わずにしまったような仕合せをも感じられるかも知れない。

「それともお前はやはりお父さんのようにいろいろなことを為たりされたりすることがよかつたかも知れない。イヤなことでも知らないでいるより知っていた方がよいかもしれない。そこまでゆくとどう言っているか分からないくらいだよ、お父さんはできるだけのことをしたが、おまえのからだが強かつた。しかしあのとときもつと早くおまえをどうにかすれば……。」「

そうすれば、お前はそういう姿で、そんなにまで悲しそうな顔をしなくともよかつたかも知れない、どこにいるかさっぱり判らないようなお前にしなくともよかつたかも知れない

い、私がわるかったかもしれない、しかしどうにもならないことだ。おとうさんも一度は生みつけたものを怨んだときがある。そのようにお前もそれを考えているかもしれない。私はしばらくすると私自身の腹の中に窃そつと聞きき耳みみを立てるように、何かをさぐりながら聞こうとした。

「おれはまた下らないことを喋り出した。おれはへんに慍々し出してしまっていてしまいへんになるかも知れない。」

私は小鳥の顔を見上げた。ツイツイと止り木を移っている間に、うすうすその顔が目についた。

「オイ、あそこに、ああいうふうにも一人だけかが覗きこんでいる奴がある。ツイツイとうごいている奴のそばに、も一人、たしかに覗いているものがある。」

女はうしろ向きに、次の竹窓を隔てて畳の上に、何かに読みふけっているらしく見えた。「鳥籠にですか、鳥籠はきようはどこへ出ているのでしょうか。」

「座敷の軒だ。」

「誰もいない、ほんとに見えはしませんの。」

「ほら、その、鳥かげだ、すうつと映ってくる。」

女は、佇ったまま、眼を凝らしていたが、すぐに脆くもろ涙ぐんだなみだ。そしてなお飽かず鳥籠を見つめていたが、「此処の家はもう厭ですから越してしまいませんか。」と心からそう言った。

「何処へ行つたつて面白くもおかしくもない世の中だ。つづめていえばイヤなことばかりだ。」

私はそういうと、ぐったりと跪座あぐらを組み、そういうとき吐息をすると、それなりからだのちからが抜けてしまうような気がするように、だらりとしてしまった。がっかりして俯向いていたが、何も彼も詰からない、くさくさした気になって仕方がなかった。起きるのも寝るのも、そうして、こうして坐っているのさえ厭だった。「おれはおれ自身をどうしていいのかさえ分らない。何て怠屈で不愉快なダラけた気もちだろう。」と思えた。

「おれはちよいと医者のところへ行つて見ようと思うんだ。まだ尋ねたいこともあり、だいいち、あれがどんな原因で死んだかということをも聞いてみたいような気がするから。」私は考え考えいるうち、ふとずつと先きから、執拗しつこく心にねばりついていることを、そつと落ちついて、女に、そう大事でないように云つた。

「だって今さらそんなことを言つたつて、どうにもならないことだし……だしぬけにそん

なことを言つて行くものじゃありませんわ。」

「どうにもならないことだが……だが、あのときそれを聞くことを忘れた。大事なことだ。」

「どうということが原因で、そして私どもも為るべきことをどれだけ手ぬかりしたか、ああいう風にしていたらあんな事にならなかつたとか、そういう取り返しをつかない又気のつかないことを、今になってそれを知ろうとすることは、何となく死児へ挨拶をしたような気もするし、私だちの心もちをも和らげることができそうに思えた。」

「うっちゃって置けば、それなりで忘れてしまう。忘れてしまえばなお取り返しがつかない。」

「そうも考えたが、わざわざ私が医者のところまで行き、肩の凝るような気もちでそれを尋ねることを考え出すと、やはり鬱陶うつとうしい気がした。」

「やはり行かないでいる方がよいか。そういうことは尋ねるものでないかも知れない。向うにしたつて尋ねて行つたらどんなにばかばかしく考えるかも知れない。しかしまだ何となく私だちと医者とにつながっているものがある……。」

「それは向うにないかも知れない、しかし正直に私にわだかまっているものが、凝らずゆ

るまゝに残っているのはどうすることもできない。

「却つて微笑われるくらいですよ、あの子はああいふ弱い子だったので、いまさら何と言つたつて——」

「何と言つたつて為様がない、ないがしつこくおれは何もかも瞭然と頭にイリかねるのだ。」

そう言いかけ、私はばかばかしく死を疑うぐどんな人間の頭になつてゐるのに、ふと気がついた。「おれはおれ自身で諦らめきれないで、逃げ道ばかり捜しているのだ。医者にして誰にして何を知つてゐるものか。おれさえ何かに触ればそれにくつつこうとしてゐるのに、おれはなんだか少し卑怯ひきょうになつてゐる。」私はそう思うと、すこし肩がかかるような気がした。

「初めつからこうなつてゐるのかも知れない。そうしてだんだん日が経つと私もしまいはけろりとしてしまうのだ。人間らしく忘れてしまふかも知れない。」

そう思うと心が軽くなつたが、消炭のようにうすい不愉快さが、かげのように映つて来た。が不思議にそのかげはあざのある肌のように消えようとしなかつた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 室生犀星集 童子」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年9月10日第1刷発行

底本の親本：「現代日本小説大系36」河出書房

1955（昭和30）年

初出：「中央公論」

1922（大正11）年10月号

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2013年10月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

童子

室生犀星

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>